

Resume 1

【前回までの演習について、まとめても良さそうなこと】

●1. 研究計画書に書くべき項目 (研究を組み立てるための構造において必ず必要な項目。研究の物語の骨組み。)

1. 研究の背景 (この世に対する事実確認。きわめて慎重に触れるべき部分。そこから問題点抽出。)
2. 研究上の問い (5W1Hの枠で簡潔に。問いを明らかにしないと何に答える研究かが不明となる。自分も読者も。)
3. 先行研究の批判的検討 (同種の問いに取り組んだ先達の例。無いということはまず無い。先達の研究の不足点を指摘。)
4. 研究方法 (藝術文化研究の場合は、「どのような研究的視点をを用いるか」[ex. 記号論など]を示す部分。)
5. 研究目的 (上記の問いを明らかにするために、何を対象として、何を、どこまでやるか、を明確に示す。)
6. 研究の意義 (予想される研究成果が、社会にどのような好影響を与えるか、前向きに示す。)

●2. なぜ本演習で、渡辺裕「音楽における意図と意味」を読むか？

1. 研究の構造・研究作法を知るため (ex. 論の構造、研究方法の処理、先行研究の触れ方、注釈の使い方、他)
2. 「研究的視点」(= 文系研究では研究方法) なるものを知るため。具体的には学問領域名で示される(語用論など)。
3. 渡辺は「研究的視点」(= 研究方法)についてどのように論じているか、どのように活用するかを具体的に知るため。
4. 〈作品は、どのように、意味を伝えるか?〉という、藝術・デザイン上の普遍的問題を考察するきっかけとなるように。

●3. 渡辺論文「一 はじめに」で示された、研究の構造(研究の物語の骨組み)

1. 研究の背景

「われわれは音楽体験の中で、そこに何らかの意味が存在している、とほとんど直感的に感じている」(p.83)

2. 研究上の問い

「意味作用が成立するためにはいかなる条件(※ what condition)が満たされなければならないか」(p.84)

3. 先行研究の批判的検討

※2章で論じられるためここで明示はない。ただし、先行研究としてグライス語用論があげられる。

4. 研究方法

※段落2をとおして、研究方法として、「プラグマティクス」(語用論)研究的視点という研究的視点が有効であることが示される。

5. 研究目的

「本論はこのプラグマティクスの考え方を援用しながら、音楽においても(略)言語の場合と全く同様に意味作用が成立すること、そしてそれが、作品として利き手に呈示される限りにおいて、一つの特異なあり方を示していることを明らかにしようとするものである」(p.84)

6. 研究の意義

「言語における意味の隠された一面を明らかにすることにもなる筈」(p.83)

●4. 「二、発話者の意図とその了解」 > 「二 - 一、『意図』の複合的構造」の内容

1. 渡辺が先行研究として示すのが、p. グライスの論文「意味するということ」“meaning” (1957)。

2. 【グライスの研究目的】

「“mean” という動詞がいかなる時に用いられ、いかなる時には用いられないかを手がかりにして、意味作用の成立条件を明らかにしようとするもの」(渡辺、p.85)

3. 【意味するということ ” meaning ” という動詞 (※動名詞 ?) が用いられる 2 つのケース】

▼「自然的意味する、ということ」 natural meaning (グライス独自の用語)。

- 因果関係のある事象のうちの因果の方を告げて、結果の方を示すこと

(この発疹ははしかを意味する) 渡辺 p.85

(今度の予算案は来年度が厳しい年になることを意味している) 邦訳書 p.223

▼「非自然的意味する、ということ」 non-natural meaning (グライス独自の用語)

- 因果関係のない 2 つの事象の片方を示し、発話者の意図によって、信念のような認知的態度でもう片方を示すこと。(c.f. 邦訳書 p.227, 原著 p.55 上)

- 原著ではこれを “ mean NN ”、邦訳書では、「意味 NN」 と示し、自然的意味と区別している。

- グライスや渡辺が研究対象とするのは、「非自然的意味する、ということ」の方。